

血液内科



後列左より 酒井、水上、中西、岩重、北村、廣澤
 中列左より 田中、後藤、山口
 前列左より 川原、渡辺、塚田、森本、東

我々血液・腫瘍内科医マインドは、地域に根ざした診療を目指し、患者と常に向きあい真摯に診療に取り組んでいくことです。生活様式の変化や高齢化に伴い、日本人の2人に1人はがんになる時代が到来し、がん治療の中で今まで最も遅れていた薬物療法がこの十数年で急速に進歩しました。これには、がん細胞の特徴が研究され、がんの弱点を狙った新薬(分子標的薬など)が数多く創り出され、更に信頼性の高い臨床研究にて抗がん薬の有効な投与方法が確立されるようになったことが大きく起因します。

このなかで、白血病を代表とする血液病は、薬物療法だけで完治できる数少ないがんとして知られており、現代創薬の恩恵を最も受けたと言えます。本院が開院した頃、日本における白血病の長期生存率はおよそ数%程度であり、白血病は「不治の病」の代名詞でありましたが、現在では50%を超える生存率が得られており、もはや「治るがん」の一つです。また、忘れるべきでない進歩は副作用の軽減に成功したことです。これによって、治療完遂率は高くなり、患者の生活の質は向上し外来化学療法も可能となりました。

この時代背景のもと、当科は平成17年にがん薬物療法部門として誕生しました。平成19年には血液診療が移管され、今年1月1日から「血液内科」となりました。当

科には血液専門医・指導医やがん薬物療法専門医・指導医が在籍し、更に若松病院緩和ケア・血液腫瘍科や緩和ケアセンターとの連携にも着目し、幅広い血液・腫瘍の診療に邁進しています。

外来化学療法室は25ベッドを有し、全診療科の外来抗がん注射薬は同室に集約されています。主な業務は、①投与内容の確認、②調剤、③投与時の適応・副作用チェック、④患者へのオリエンテーションです。同室には、血液・腫瘍専門医に加え、がん化学療法認定看護師やがん専門薬剤師が勤務し、鉄壁の布陣と言えます。各科から様々な抗がん薬投与の依頼が毎月500件前後あり、時に複雑にて新薬もあります。にもかかわらず安全に投与できてきたことは結集したチーム力と言えます。

一方、入院診療は感染症との闘いでもあり無菌管理を必要とします。西別館3W病棟には完全無菌室があり、患者増に伴い10A病棟に増設する予定となっています。これらの病棟には無菌治療に精通した多くの優秀な看護師がおり、チームとして医療を支えています。また、薬だけでは治癒できない血液病には奥の手があり、それが造血幹細胞移植です。本院は骨髄および臍帯血バンクの認定施設であり、昨年新たにバンクドナーによる非血縁間同種末梢血幹細胞の施設認定を得ることができました。一方、移植前処置として行われる強い抗がん薬に耐えられない患者には、近年、移植前処置を軽減した移植が開発されています。このように、ドナーソースの拡大だけでなく移植方法の改良は移植医療の発展をもたらすことは間違いありません。我々はまだ力不足な所があり、今後とも病院、大学や地域の協力を仰ぎ、血液・腫瘍の診療をこの地に浸透させていきます。このためには、若い医師の育成にも力を注いでいきたく、Dr. W.S.Clarkの有名な言葉を内科的に改変して述べます。「Boys and girls, be ambitious. Be ambitious not for money or for selfish aggrandizement, not for that evanescent thing which people call fame. Be ambitious for the attainment of all that a physician ought to be.」

(塚田 順一)